



第24回 全国棚田千枚田
サミット

長野県
おたりむら
小谷村

平成30年9月8日（土）・9日（日）

「集う」仲間と「守る」暮らし
北アルプスの水と土で育む棚田の絆



報告書



もくじ

<第 24 回全国棚田（千枚田）サミット レポート編> ······	1
開催プログラム ······	2
はじめに ······	3
開催概要 ······	4
開会式 ······	5
事例ディスカッション これからの農業を考える！～山間地農業の共存の在り方～···	6
お昼ごはん ······	10
分科会 1 中山間地の過疎を救う ～移住農業女子が集まる魅力～···	14
分科会 2 考えよう！ 農と観光のコラボレーション ～棚田の生き残りに賭ける～···	16
分科会 3 小谷村の暮らしから見る“食と農”～箱膳が伝える『食べごとの心』～···	18
分科会 4 棚田の保全と整備を考える ······	20
分科会 5 棚田が育む生命（いのち）～小谷の生物が伝える自然環境～···	22
分科会 6 棚田まもりびとミーティング～棚田はどうやって守るのか～···	24
分科会 7 世界の傾斜地農業を語ろう ······	26
分科会 8 自然の中で支えあう姿 真木集落「アラヤシキの住人たち」のいま ······	28
全体交流会 ······	30
北アルプスめぐりツアー ······	34
閉会式 ······	38
会場の様子 ······	40
参加者の声 ······	42
<運営・スタッフ編> ······	43
会場設営（屋外編） ······	44
会場設営（屋内編） ······	46
当日スタッフの動き ······	48
サミット終了後の動き ······	50
スタッフから ······	51
会計報告 ······	52
まとめ ······	55



■ 第 24 回全国棚田（千枚田）サミット レポート



開催プログラム

はじめに



9月7日（金）

時 間	内 容	会 場
16:00～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 理事会	白馬アルプスホテル
17:00～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 総会	白馬アルプスホテル
18:30～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 情報交換会	白馬アルプスホテル

9月8日（土）

時 間	内 容	会 場
09:30～	オープニングイベント	梅池社会体育館
10:00～	開会式	梅池社会体育館
10:30～	事例ディスカッション これからの農業を考える！～山間地農業の共存の在り方～	梅池社会体育館

休憩・昼食・移動

12:00～	映画「アラヤシキの住人たち」ダイジェスト版上映	梅池社会体育館
分科会 1部 13:30～14:50 / 2部 15:10～16:30		
1 中山間地の過疎を救う～移住農業女子が集まる魅力～	梅池高原総合センター3F	
2 考えよう！農と観光のコラボレーション～棚田の生き残りに賭ける～	ホテルイブプラザ	
3 小谷村の暮らしから見る“食と農”～箱膳が伝える『食べごとの心』～	梅池高原総合センター2F	
4 棚田の保全と整備を考える	セルリアンアルペン	
5 棚田が育む生命（いのち）～小谷の生物が伝える自然環境～	ロッヂ若松荘	
6 棚田まもりびとミーティング～棚田はどのように守るのか～	梅池パーク	
7 世界の傾斜地農業を語ろう	梅池スキー学校	
8 自然の中で支えあう姿 真木集落「アラヤシキの住人たち」のいま	梅池社会体育館	
休憩・移動		
18:30～20:30	全体交流会	ホテルグリーンプラザ白馬

9月9日（日）

時 間	内 容	会 場
07:30～	北アルプスめぐりツアー	
11:30～12:00	閉会式	梅池社会体育館
12:00	解散	



第24回 全国棚田(千枚田)サミットin長野県小谷村

「棚田サミットinおたり」へのご参加に感謝して



長野県小谷村で開催した、第24回全国棚田(千枚田)サミットは、全国各地から約650名という大勢の皆様のご参加をいただき、厚く御礼を申し上げます。

本来なら白馬三山をはじめとする北アルプスの山々や、緑豊かな里山など、小谷村らしい景観をご覧いただく予定でしたが、当日はあいにくの雨になり、残念で悔いが残ります。

人口3,000人を下回る小谷村は、人口減少や高齢化に伴う農業の衰退など、農業の課題を抱えている地域の代表のような村であります。そして、全国各地の中山間地域が同様な課題を抱えていますことを承知しています。

このような現状を踏まえ、小谷村での棚田サミットでは、どのように農業を考えていくかに対して、各専門家の協力の上、観光・食・生物などあらゆる方向から考えていただく場とし、分科会では、それぞれの角度からの意見・提言を述べていただきました。

このサミットには、農林水産省の関係者をはじめ、地方自治体の関係者、そして多くの農業に携わる方々の参加があり、この場で話し合われたことが、少しでも今後の農業施策にプラスになることを期待しています。また、全国各地で耕作条件の不利な「棚田」を一生懸命保全している皆さんへは、棚田が維持されやすい体制が整い、将来も活動を継続されることを望んでいます。

全国各地から参加された皆様に、この小谷村を知っていただきたく、交流会やツアーでも地元色を多く演出させていただきました。「また来てみたい！」と感じてもらえば幸いです。

最後になりましたが、このサミットを契機に、棚田保全や中山間地農業の今後の在り方に少しでも改革できる方向に進んでいくことを祈念し、雨の中の2日間、「棚田サミットinおたり」へ参加していただいたことに感謝を申し上げ、御礼のあいさつとします。ありがとうございました。

長野県 小谷村長 松本 久志

開催概要



開会式

開催テーマ

「集う」仲間と「守る」暮らし 北アルプスの水と土で育む棚田の絆



開催趣旨

農村風景には、山があり、川があり、民家があり、そして『棚田』がある。この風景は、人々に“安らぎ”や“癒し”を与える力もある。この貴重な農山村環境を維持していくには、ここで暮らす人々が力を合わせ、生活を守っていく姿勢が必要である。とりわけ山間地農業は、生産が落ち込み、高齢化・離農していく情勢ではあるが、積極的な交流や支援をしてくれる都市住民もいる。

農業に理解ある仲間が集まり、農山村環境を守る活動を推進し、これから棚田を中心とした山間地農業のあり方を考える。

開催地概要

山林が90%を占める山間地域の小谷村。わずかな平地に53の集落が点在し、その集落の周辺に農地がある。平地が少ないので、水田は傾斜地に連なる「棚田」を形成している。山間地農業の大問題である農家の減少に伴い、連なる水田が徐々に虫食いとなり、集合した棚田が年々減少している。昭和50年代は各集落に見事な棚田があったものである。

その小谷村、面積は267km²、村を南北に流れる姫川に対して東西に急峻な渓谷を形成している。人口は約3,000人。主要な産業はスキー場を中心とする観光産業である。また、脆弱な地質から昔から多くの土砂災害が発生している。平成7年の長野県北部豪雨災害、平成26年の神城断層地震など、地盤のもろさからの被災も記憶に新しい。

農業に関しては、昭和40年代は水稻を中心に養蚕等も盛んであったが、経済成長・スキー場開発とともに、第2、第3次産業へ移行していった。

小谷村は、山間地であるが故、山の恵みが豊富であり、山菜・キノコ類は特産品として定着している。また、近年、冬場の雪を利活用し雪中野菜など、地域の特性を生かした産物に着眼し栽培活動を行っている。この大自然を有効に利用し、貴重な産物から希望を見つけ、また都市からの移住者など新たな考えと昔ながらの伝統をコラボレーションした村づくりに向けて取り組んでいる。



9月8日(土)

9:30～オープニング
10:00～開会式



主催者



全校児童131人、小谷村唯一の小学校、小谷小学校合唱団がオープニングを飾った。
県歌「信濃の国」と「ふるさと」を披露し、会場はあたたかい空気に包まれた



長野県小谷村長松本久志からの
あいさつ



ご来賓



農林水産省関東農政局長
浅川京子様からの祝辞



長野県知事 阿部守一様からの祝辞

ようこそ
小谷村へ!



長野朝日放送アナウンサーの
萩原早紀子さん



衆議院議員 務台俊介様からの祝辞



衆議院議員 下条みつ様からの祝辞

総 論



子どもたちの歌声のあと、会場の幕が開いた。最初に主催者代表として開催地 長野県小谷村長松本久志からあいさつ。そして、阿部長野県知事の「棚田は観光資源として可能性がある!」という祝辞や、務台衆議院議員の「棚田を守ることは、国家の品格を守ること」といったメッセージなどに、会場は熱い拍手を送った。

事例ディスカッション

これからの農業を考える! ~山間地農業の共存の在り方~



1日目 9月8日(土)10:30~12:00

高齢化・担い手不足など全国的な問題が山積みの農業。小谷村の農業情勢も大きな転換期を迎えており、このままでいくと、農地が荒野や山林へと変わり、民家・棚田・里山が一体となった農村風景が壊滅してしまう。

小谷村の良いところを理解して応援してくれる「集う仲間」。また、ここで生活する人々が農地を守っていく「守る暮らし」。地勢や環境から考えた農地保全の在り方や農業と生き物との共存、また観光資源と棚田とのつながりなど、今後に向けた取り組みについて、松本小谷村長を交えた3人のキャストが1時間半に渡って考えた。



小谷村の現状は

とりわけ山間地は傾斜地で生活する。生活する家屋は、傾斜地とわずかな平地に混在している。当然、畑は傾斜している。水田は、その傾斜に沿って段々に「棚田」を構成する。

ここ、小谷村は、面積の90%が山林、南北を流れる姫川に沿って東西に急峻な山々が連なり、渓谷型の地形である。かつて、小谷村では農業を主としていたが、スキー場開発により観光業など第3次産業が発展し、それに伴い第2次産業も活性化した。だが、その陰で農業が衰退していく状況になった。

昭和33年の小谷村誕生時の人口は、約8,000人。現在(平成30年)は3,000人を下回り、過疎と高齢化が著しく進んでいる。加えて、農業離れにも拍車がかかり、耕地面積は最盛期の6分の1にまで落ち込んでいる。かつては、段々と連なる見事な棚田であったが、年々1枚また1枚と徐々に耕作放棄され、現在では荒廃地と耕作地が混在している。



小谷村長。現在2期目を務める。小谷村で生まれ、長野県職員として土木畠を歩み、砂防事業・防災事業に多く携わってきた。小谷村は平成7年に長野県北部豪雨に見舞われ、道路寸断により54集落のうち30集落が孤立、被害総額1,000億円にのぼった。その際、多くの災害復旧事業に尽力した。小谷村の実情を話すとともに今後的小谷村の目指すべき方向性も語った。



上:進行役は、長野朝日放送の萩原早紀子さん
小谷村出身者ならではのコメントに拍手
中・下:キャストは会場右手の特設ステージで
トーク。ステージではパワーポイントや村の今
を撮影した映像を映した

山間地農業を維持するためには

事例ディスカッションで信州大学の内川義行先生は、1970年代と現在において、小谷村の農地の耕作状況がどのように変化していったかを調査し、次のような内容を発表した。

1970年代、集落周辺を中心に傾斜地で団地を形成し耕作していたことがうかがえる。小区画不整形の水田を部分整備(2枚⇒1枚にする)など、農家が傾斜地農地を改良していった経過も見られる。この行為は、水田管理だけでなく、アクセスする農道、効率よく取り入れられる用水も一部改良され、より効率的な営農が実施されることとなる。加えて機械化による労力削減がなされていく。

さらに平成に入ると、この小谷村では、村南部の南小谷地域を中心に、圃場整備事業を導入。2ha程度から約35haまで規模の大小はあるが、棚田の区画を整理した。平成30年の耕作状況を見てみると、50年前に小区画不整形の水田だったものを整備した農地は、今現在も耕作されている。逆に荒廃している農地は、50年前の形のまま、水田の名残のある荒廃地に様変わりしている。

農家の減少・高齢化は、山間地域を中心に年々増加している。今後若い世代や高齢農家が継続して農地を維持するためには、労力を軽減し、機械化された効率的耕作条件を提供すべきではないか。小区画不整形の棚田を改良しなければ、山間地の農地は守れない時代になっている。

内川 義行 さん

信州大学学術研究院農学系助教。1968年東京生まれ、信州大学を卒業後、長野県職員を経て、信州大学農学部で教鞭をとる。本ディスカッションでは、昭和40年代から現在に至る小谷村の農地の変化を伝え、今後の山間地の農業の在り方を農地整備分野の視点に立って話した。



• CAST • 松本 久志さん(小谷村長)

内川 義行さん(信州大学 学術研究院農学系助教)

武生 雅明さん(東京農業大学 地域環境科学部教授)



観光・福祉・農業の連携を！ 観光農地としての整備も！



小谷村の地域と棚田が残しているもの

小谷村の伊折地区を拠点に学生とともに自然の多様性を研究している東京農業大学の武生雅明先生は、次のように話した。

小谷村は地滑り地帯であり、各所に崩壊地がある。離村し、農地が荒廃するだけでなく廃屋も近年目立ってきており、小谷村伊折地区でも一部農地が荒廃し廃屋もあるが、この地で、そこに住む住民と生活してみると、地域固有の文化が多く残されていると感じる。昔ながらの農法や機械化されないこと、また、土地の形状を変更しない小区画不整形な水田が残されていることで、珍しい植物や生物が生存している。

もし、圃場整備など地形の変更を行えば、この貴重な生物などが残る環境が破壊されるかもしれない。一方で、圃場整備や機械化を進めなければ、農業は維持できない。生物の多様性を守るためにどうあるべきかを考えなければならない。貴重な植物や生物は後世にも残さなければならないが、ここで農業を営む方の労力を考えると、ジレンマが生じる。

山間地にある財産をどのように生かすか

現在、小谷村内の4か所で「棚田オーナー制度」を実施している。すでに全国各地で実施されているが、小谷村も約13年前から取り組んでおり、今年は45組のオーナーと契約している。都市部住民が主で、春の田植え・秋の稲刈りを体験し、収穫したお米を持ち帰るものである。

オーナーには、家族連れや若い世代も登録されており、作業を通して地元の農家との交流も深めている。

武生先生は、「農地は教育の場、福祉の場」と訴える。都市部では年々心を病む若者が増加している。IT化などで社会教育の場が減少していることが大きな一因とも言える。山村生活を若者や学生に体験させることで棚田を活用できないかと唱える。

武生先生が率いる東京農業大学の学生たちは、この小谷村で生活し、生物や植物の研究をしながら、放棄された棚田の復活・地域住民との交流を行い、山村生活の重要性を体験している。

また、棚田であるが故、過大な労力と不効率性を補うべき、付加価値農産物の発掘を見据える。新潟県佐渡市の取り組みを事例に、トキが生息する環境での米作りがお米の価値を上げ、また対価としても反映する事例を紹介した。



武生 雅明 さん

東京農業大学教授。1965年大分県生まれ。東京農工大学を卒業後、千葉大学大学院を経て、埼玉県生態系保全協会職員などを務め、現在、東京農業大学にて教鞭をとる。生物・環境が専門。小谷村伊折地区の古民家を研究室にして、小谷村の生態系について研究する。山間地農地やそこで生活と生態系のつながり、また、環境保全から考えられる今後の棚田の生かし方を話した。

今後、山村環境を後世に残すために

山村地域の営農活動は、一人ではできない。とりわけ渓谷型の地形の小谷村は、水田に水を取り込むのも苦労する。特に水源の乏しい小谷村の東側の集落は、棚田維持のため、水の確保が最大の課題である。

水源から等高線に沿って「山腹水路」がある。よって、水路は急峻な崖に乗っているイメージである。脆弱な地形から、春の融雪・梅雨や台風の豪雨により、水路が崩落するケースが頻繁である。ほとんどの水路が昭和40年代に設置されたもので、現在は老朽化が激しい。

水路の維持は、春の清掃・水あて・夏場の草刈りなどが主である。管理活動も人口減少により労力が倍になる。「水を容易に使えることが、水田を維持するためには大事なこと」。ある農家は訴える。

多くの人手と人力での作業が当たり前だった時代から労力軽減と効率化を求めれば、山間地農業は割に合わないことは当然である。

これから、この山村環境を残すにはどうすればいいのか？

「少しでも管理しやすく、後継者が引き継げるような環境整備は不可欠」という信州大学の内川先生の意見のとおりである。

村の魅力的な人材が、人を惹きつける



ディスカッションの最後
は、阿部守一
登壇。
今日は棚田の在
村からはじまり
と熱く語った良
い事例を小谷に示してもらつた。

おわりに

山村環境、山間地農業は貴重で今後も残したい大事な財産である。国は中山間地域等直接支払制度など、傾斜地農業に対する一定の助成を行っている。しかしながら、やはりここで生活していく人々が何を求めて、今後どうすべきかを見い出す必要がある。

小谷村でも国からの補助金などの要綱に合わせて、若干押し付けの活動を行なながら、事業を実施し維持活動をしている。しかし、それでは本当にここで活動していくと考える農家や集落の自主性には欠ける面がある。

各地域でそれぞれの文化があり、風習がある。日本各地では気候が違うので作付け方法も異なり、さらにそれぞれの伝統がある。衰退していく山間地農業が少しでも前進し、人々の心のよりどころを演出するためには、もう一度「農地を守る」という強い意志を確認することが必要だろう。

農業の低迷により、農家の意見が反映されにくい現状ではあるが、国土の保全や食という違った角度からのアプローチにより、山間地農業が後世に引き継がれ、日本の大事な遺産であることを広く認識していただくことを願うところである。

多くの棚田保全を実践している農業者、棚田に魅力を感じ支援していこうという応援者が集う「全国棚田サミット」。日本の農地を守るという認識を再度確認しあう場であってほしい。全国の農業者の活動を、この小谷村から少しでも発信できることができればうれしく思う。

<報告：山田久志（小谷村役場観光振興課）>



心のこもった手作りの味を届けたい!

1日目は、会場から程近い、梅池高原エリアの選りすぐりの12か所のホテルやレストランに移動してのお昼ごはん。どの会場もメイン会場である社会体育館から徒歩12分圏内ではあったが、10分を超える2か所の会場については送迎バスを用意した。

メニューは、12か所それぞれで“地元の食材と小谷村の味”を演出するように徹底し、各施設で考案してもらった。参加者には雨天の中、ご足労をおかけしたものの、食材からおもてなしまで小谷村を味わっていただくことができた。

棚田サミット会場周辺マップ





普段は手に入らない希少品の小谷産野豚！

脂乗ってます！

「ひよどり山荘」では角煮で勝負

こってりと脂身の多い小谷野豚の味わいを最大限に引き出すため、こちら(料理人)も腕の見せ所でした。



乾燥させておいたゼンマイもお鍋で茹でて

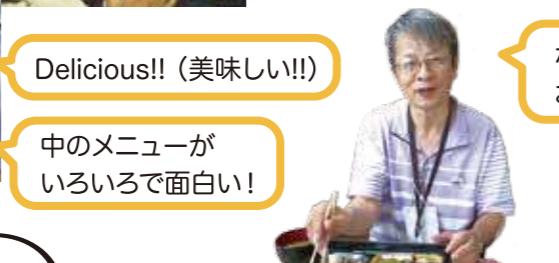


ドイツ、ペルー出身、フランス、台湾からのお客様たちも舌鼓。
日本のお弁当スタイルに感激



サン・サ・イ？ おいしいです。
何もかも新鮮で驚きでいっぱいです！

グリーンティーは、冷たいのもあたたかいのもあって、違う味がして面白いわ！！



Delicious!! (美味しい!!)
中のメニューがいろいろで面白い！

なかなかの
おいしさです！



各食事会場ではまず、
昼食引換券をスタッフに！

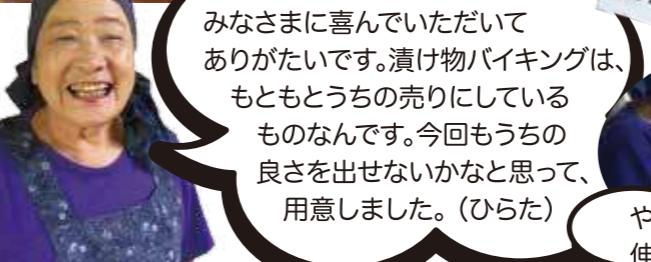


雨の中、遠目の会場はバスで。
近くの会場へは歩いての移動。
スタッフも随所に立って道案内
(村会議員、農業委員のみなさん)

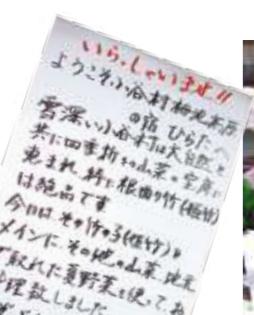


全部、地のもの。行者ニンニクは僕がその山で採ってきました。
ここは標高が2000m以上あって、味がいい。根曲がり竹も山のものがおいしい。6月に採ったもの。野菜もうちで作ったものです。

根曲がり竹とサバの水煮缶のお味噌汁が最高！



みなさまに喜んでいただいて
ありがとうございます。漬け物バイキングは、
もともとうちの売りにしている
ものなんです。今回もうちの
良さを出せないかなと思って、
用意しました。(ひらた)



やまそは春になって茎が
伸びてきたら塩漬けにします。



やまその煮付けって何だ
ろうって？ うちのほうでは
食べないんですよ。だから、
それを今、おかみさん
に聞いていたところです。

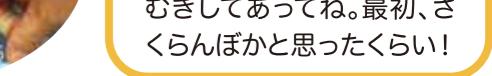


「ふるさと」では、
家族ぐるみでおもてなし



いつものように、
いつもの味でおもてなししました。

さすが、おそば
美味しいです！



なめこ汁が
美味しいです！

ミニトマトのピクルス、すぐ
良かった。ていねいに湯
むきしてあってね。最初、さ
くらんばかりと思ったくらい！



長崎県から
鹿児島県、山口県、新潟県などからの
みなさま

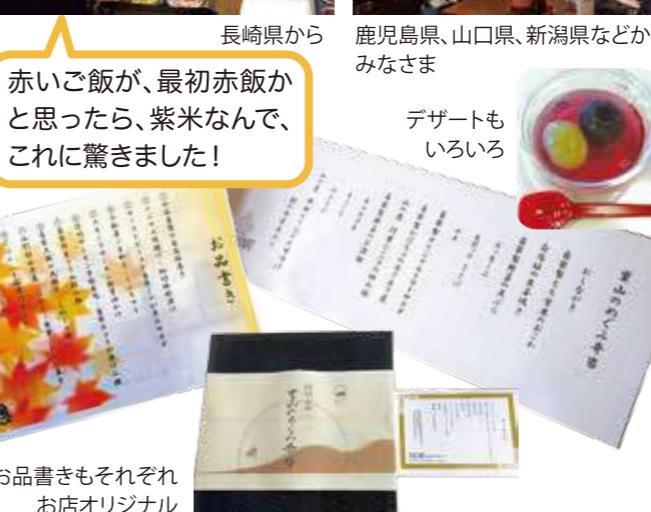
赤いご飯が、最初赤飯か
と思ったら、紫米なんで、
これに驚きました！

デザートも
いろいろ

山梨県から

食事のあとは、分科会会場へ移動
スタッフが会場への道を説明

地元の味がいっぱいあって、
いろいろ食べられて楽しい
です！



お品書きもそれぞれ
お店オリジナル

山梨県から

2日目
お弁当も
美味しい！

9日

2日目のお弁当は、お持ち帰り用弁当の人、
社会体育館内で食べる人、いろいろ



分科会 1

中山間地の過疎を救う～移住農業女子が集まる魅力～



分科会

1日目 9月8日(土) 1部13:30～14:50 / 2部15:10～16:30

第1日の午後は、全国棚田サミット史上最多、8テーマの分科会を開催した。さらに、1部・2部(各1時間20分)開催とし、2つの分科会に参加できるようにした試みもはじめて。こうした小谷村独自の分科会設定もおおむね好評で、有意義で充実した時間となった。申し込み総数、1部452人、2部441人。

なお、分科会会場は梅池高原内で徒歩移動が可能な8つの会場。雨天であったことや高齢の参加者には移動の負担があったものの、小谷村(梅池高原エリア)の散策を兼ね、移動も楽しんでもらうことができた。



・CAST・

藤原 真弓さん

伊折農業生産組合 古民家「ゆきわり草」管理人

福永 朋子さん

新規就農者

稻澤 そし恵さん

元信濃大町地域おこし協力隊 大町市新規就農者

分科会1のキャストは3名とも全員東京生まれ。そして、小谷村をはじめ信州へ移住してきた農業女子。小谷村伊折集落にお嫁に来て、「雪中キャベツ」の栽培をはじめた藤原真弓さん、小谷村伊折で少量多品目の野菜を栽培し、直接消費者に届けている福永朋子さん、近隣の大町市で地域おこし協力隊として活動し、そのまま移住を決めた稻澤そし恵さんだ。彼女たちが、自らの迷いや選択など信州への移住を決めた背景や、地域活性化に挑戦している現在の活動ぶりを語った。その後、3班に分かれた参加者たちと車座対話で盛り上がった。申し込み総数62名。



藤原真弓さんは1997年に小谷村に嫁いできた



福永朋子さんは、藤原真弓さんに背中を押され、小谷へ移住



地域おこし協力隊になるまでの道のりをユニークに紹介した
稻澤そし恵さん



3班に分かれ、キャストとじっくり語り合った

CASTから

「農業女子」といってもベテラン農業者の方々の前で何を話したらよいのか、皆で打ち合わせる中で、分科会に参加される方達の関心は、「私たちがどうして移住や就農をこの地域に決めたのか」ということではないかということになり、3名それぞれの立場での発表をさせて頂きました。

不慣れなため時間配分が難しくもありましたが、2回目は少し慣れ、参加者の皆さんのお話も最後まで聞くことが出来ました。行政の方、NPOの方、棚田をご指導している方など様々な立場や環境での悩みなども伺ってシェアすることができました。

課題の解決に王道はないかもしれません、棚田や中山間の農村地域の方々が皆で交流しながら、お互いの課題や情報交換などをしていくことはとても有意義なことであると感じました。交流会でも沢山の方にお声かけ頂いて、若手や女性の農業者へ皆さん大いに関心や期待を寄せていると感じました。私達にとってもとてもいい勉強になりました。ありがとうございました。



藤原 真弓さん

小谷村伊折集落で農業を始めて2年目。まだまだ新入りですが、このような場で小谷の魅力を伝えることができてとても光栄に思いました。これを機に多くの農業者の方々と関わることができました。これからもさらに交流を広げていきたいです。



福永 朋子さん

自分が移住した理由や農業を通して地域とどう関わっていくかなど、改めて振り返るきっかけを頂き、感謝しています。また、全体交流会や北アルプスめぐりツアーでは、棚田を通して全国の素敵な方々と交流ができるとても有意義でした。



稻澤 そし恵さん

参加者から

非常に良かった!
積極的な女性の姿に感心しました。



全国に「移住農業女子」のような女性たちが出てくれば、地方にも光が届く日が来ると思います。

会場コラム

分科会1の会場は、梅池高原総合センターの3F。梅池高原の観光案内の拠点として機能する建物。広い研修室にグループワーキングが可能なスタイルでテーブルと椅子がセッティングされた。これは、キャストの3人と参加者による車座対話をねらったもの。



分科会 2



考えよう! 農と観光コラボレーション～棚田の生き残りに賭ける～



分科会 2

・CAST・

石井 史郎さん
特定非営利法人まちもり 理事長
稻倉の棚田保全委員会

玉崎 修平さん
棚田フューチャーズ代表



左が石井史郎さん、右が玉崎修平さん

棚田に新しい時代が訪れていることを感じさせる分科会であった。キャストの2人は、棚田に魅せられ、ともに長野県上田市稻倉で棚田環境を活用し、高い付加価値を生み出している、いわば「都会人」。新しい技術を活用し、農と観光を結びつけ、棚田を輝かせる活動を展開する。分科会2では、米の生産性だけではない棚田の数々の魅力を都会人の視点から切り取り、あざやかに見せてくれた。ドローンを使った「イーグルフライトアドベンチャー」や「棚田キャンプ」など、新しいアイデアが満載。観光で人を呼ぶという、棚田での新たな保全活動に参加者たちは惹きつけられた。申し込み総数186名。



イーグルフライトアドベンチャーでは、ドローンで撮影した映像を棚田で楽しめる



申込者数も多かった分科会 2 の会場は満員



1部、2部ともに参加者たちから質問や意見が続々と出た

| CASTから

分科会 2 を担当しました長野県上田市「稻倉の棚田」です。約200名様のご参加を頂きまして活気に溢れた分科会となりました。まずは厚く御礼申し上げます。

さて、各地の有名棚田では「自治体」による棚田運営と観光実績がますます充実(つまり公営)する一方、稻倉では地元ボランティア主体で棚田運営を行っており(つまり民営)、現状では資金難と高齢化、人材不足により、このままでは数年後の棚田保全委員会解散が避け難い状況です。その窮状を突破する策として「棚田という環境を活かした特徴ある観光事業」で集客し、増収を図ろうとしているわけです。一見賑やかに思われている稻倉も、実は「最期の賭け」に出ているのです。

来場されたみなさんの真剣なご質問に各地域の棚田が同様の難題に直面していることを実感しました。

地域で解決不可能な高齢化、人口減少、年金支給年齢引上げ等の社会構造変化の影響をもろに受けるのは行政支援の届かない限界集落や民営棚田であります。現に、長野県の棚田百選で保全活動が継続しているのは今や16箇所から5箇所にまで減っているそうです。奇しくも当日、進藤参議院議員より「棚田保護法案」提出の発表があり、我々にとってはまさに暗闇に差す一筋の光明でした。先輩たちからの支援もあって受け継いだ誇るべき地域資源である棚田を、後世に遺せるかもしれない。そんな夢を持てた「全国棚田(千枚田)サミットinおたり」に感謝しつつ、一縷の希望を胸に今日も収穫作業と来場者対応に勤しむ稻倉です。



石井 史郎さん

| 参加者から

地域おこし協力隊の方の話が聞けて、良い刺激となりました。

いろいろなコラボレーションが実現できるといいですね。頑張ってほしいです。



勉強になりました。

棚田に募金箱を置いて、協力金をもらっている事例を聞いて、これはうちも真似したいなあとと思いました！

非常に良かったです！

| 会場コラム

会場はホテルイブプラザ。ここは合宿での利用が多く、大中小のホールがあり、今回は大ホール(畳151畳分)を使用。体育館のような高い天井の明るい空間。分科会 2 は申し込み人数が1部2部とも100人に近かつただけに、広い空間での実施となった。



分科会 3



・CAST・

池田 玲子さん
長野県農村文化協会 常任委員



キャストの池田玲子さんによる食に対する熱い語りが魅力的な分科会となった。食と農を結ぶ「和食」をテーマに、伝統や言い伝え・文化など、わたしたちが大切にしなければならないものが語られた。箱膳を囲み、自らの経験から熱い思いを語る池田さんの話に熱心に耳を傾ける参加者の姿が印象的。

「自然を尊重する精神性」、「家族や地域を結ぶ社会性」、「健康長寿を願う機能性」、「風土が生む多様な地域性」といった和食の多彩な魅力や実際の食体験も盛り込まれ、有意義な分科会となった。申し込み総数53名。



会場には昔ながらの箱膳などが用意された



和室での座談会は、会場全体を使って進行が進められた。写真右は、稻の黒くなったところがコウジカビで麹菌だと教えてもらい、参加者全員が手にとって確かめた



小谷村の暮らしから見る“食と農”～箱膳が伝える『食べごとの心』～

CASTから



池田 玲子さん

「第24回全国棚田(千枚田)サミット」のご成功おめでとうございます。熱い熱いハートのサミットでした。そのためか、分科会では思わず「むらのおばあさん語り」をしてしまいました。先祖から引き継いできた自然や隣人との共生、食と農の食べごと文化。その根っこには稻・米があり、それを作る棚田がその原点だと思います。そのことをご参加された方々と共有することが出来たこと、大変うれしく思います。



相澤 啓一さん
(長野県農村文化協会)

交流会で参加してくださった方々から「今回は今まで一番の収穫だった。池田先生の話が心に響いた(和歌山からの参加者)」「知らないことをたくさん教えてもらった。いいお話だった(神奈川からの参加者)」など、いろいろなお声をかけていただいた。日本の風土とふるさとを、これからも「食べごと文化」と「棚田文化」が守っていかないと子々孫々に誇れない。そんな新たな元気をいただいた。ありがとうございました。

参加者から

昔の生活から
たくさんの知恵を
いただきました。
ありがとうございました。

引き込まれました。伝えないといけないと
行動している姿が素晴らしいです。
自分の集落にもこんな先輩女性がほしいです。
うちは役目が終わったと思っている人が多くて…。
姿勢を正して聞きました。

先人の知恵が
とてもおもしろく、楽しくお聞きしました。
箱膳は合理的にできており、
後世につなげたいものですね。
日本人は衣食住すべて先人の
暮らし方を受け継ぐべきと思いました。

箱膳から「生命」の深さを知りました。
まだまだ食べることに対して、もっと
知りたいという思いが強くなりました。

子どもたちに和食をもっと
食べてほしいと思いました。

とても勉強に
なりました。



会場コラム

会場は梅池高原総合センター2Fの和室を利用。広い畳敷きの研修室に座布団という、8つの分科会でも特徴ある会場だった。「畳の上の分科会は新鮮!」という声も上がった。参加者たちは座を正しながら、池田さんの話に向かっていた。



分科会 4

棚田の保全と整備を考える



・CAST・

内川 義行さん
信州大学学術研究院農学系助教



1日目午前中の「事例ディスカッション」でも、しなやかな棚田整備のあり方や方向性を語った内川義行さん（信州大学助教）による分科会。本分科会ではより深く「暮らし」を踏まえて足元から「棚田の整備」を考え、語り合った。農地の整備を担当する行政関係者や棚田農家も多く参加する分科会となった。

内川さんは、山間地で営む農業事情のたいへんさも踏まえながら、美しい棚田を維持するための管理可能な整備などを提案。参加者からは、自らの地域の現状についての発言が出るなど、有意義な意見交換の場となった。申し込み総数174名。



会場はダンスレッスンもできる、鏡が張られた広い空間



内川先生のおだやかな口調に会場も和む



棚田農家、行政関係者など整備に関心が高い人たちが多く参加していた

会場からは、現実的な問題など意見交換が進んだ

| CASTから

分科会4は、「棚田の保全と整備」をテーマとした。第1部・2部とも80名以上、合計約170名の参加者で行った。所属は約半数が保全団体の参加者、3割強が行政、残りがその他の方々であった。まず当方から参加者に、棚田の「保全」と「整備」は『何のために』するのか、という極めて根本的問いかけを行った。その上で、棚田では『地域の暮らしの持続』の上に、はじめて各種の価値の保全や活用が可能になるのでは?という基本構造を提起し、これを踏まえて意見交換を行った。

また「整備」というと従来、区画の改変を伴う大規模なものイメージが強いが、直近の問題として、畦畔法面への小段設置や、道・水路の維持管理を軽減し、かつ安全にするための小規模な「整備」も整備として認識し、投資すべきことを共有した(地域全体のバリアフリー化)。

それらの整備をどこに導入すべきか、保全目的と併せ「地区区分」が求められるが、その方法論を今後各地で模索し、相互に検討すべきとした。



内川 義行さん

| 参加者から

有意義な分科会でした。

現場では高齢化や過疎化で
地域は悲鳴を上げている。
生き残るために「整備」は必要。

昨日も草刈りをやってきました。
ほかの地域は棚田での草刈りを
どうしているのか聞きたいです。

行政職員として
小規模な改良も
支援していただくことは出来ないかと
国に意見したい。



| 会場コラム

ホテルセルリアンアルペンが会場。京都
大学の社交ダンス部などが毎年合宿利用す
るという広いホール。座席は、内川先生を取
り囲むよう、半円形に配置された。これによ
り、会場は、一体感のある雰囲気となった。



分科会 5



・CAST・

武生 雅明さん

東京農業大学 地域環境科学部教授



分科会5のキャストは、午前中の「事例ディスカッション」で伝統的な農法や生活技術が残る小谷村ならではの豊かな生態系を紹介してくれた、武生雅明東京農業大学教授。さらに、教え子の大学院生たちも講師として参加し、生き物や自然環境についてより話題を掘り下げ、山村の生活と生物多様性の維持・両立を考えた。

会場の後ろでは、生き物たちも展示参加。イトリゲモなどの植物をはじめ、ナカムラオニグモといった昆虫、オオコオイムシなどの水生昆虫、アカハライモリといった両生類、またアオジの巣も展示紹介してあった。申し込み総数97名。



大学院生たちもそれぞれの研究をもとに熱く語った

会場後ろには、棚田の生きものたちが!

棚田が育む生命(いのち) ~小谷の生物が伝える自然環境~

CASTから

水田の中には多くの生き物が居る。除草は大変だけれど、草が生えていれば、そこには多くの虫が来て、それを目当てにクモや鳥、カエルやイモリなどの肉食性の生き物もやって来る。この分科会では、虫、鳥、クモ、植物の研究者が、それぞれ水田生態系が持つ生き物の豊かさやその機能について紹介した。そして、水田生態系が持つ作物生産以外の価値やその活かし方について会場と共に討論を行った。

作物生産を優先する水田(緩斜面～平地)と、生物多様性と伝統文化を維持することを優先する水田(急傾斜地)とを区分してゾーニングし、後者については環境教育の場として専門知識を持った若者を積極的に他地域から受け入れて運営にあたらせてはどうかとの私達の提案に対し、会場からは賛否両論の様々な意見が出され、活発な討論となつた。講演者を務めた大学院生達にとっても、普段直接話をすることが少ない農業生産者と議論するのはとても良い勉強の機会となっていた。



武生 雅明さん

参加者から

農業をしていく上で、生物多様性が重要であることがもう少し明確に示せればいいなあ。



棚田があることによって、多様な生き物がいることなど、今後教育等に棚田を活かしていくことが存続につながると思った。

学生さんの報告は楽しかった。棚田との関連ももう少しあれば…。生物多様性が、水田や棚田にとってどう必要なのかといった視点が弱いのが残念。

若い人たちは、田んぼで生き物に出会うとすごく感動するんです。こうした環境を農家は守っています!



会場コラム

ロッヂ若松荘の専用体育館が会場。会場裏には、緑のロケーションに田んぼと民家、かかしなどの田園風景が広がっていた。会場内にも、発表用としても持ち込まれた生き物や植物などが展示され、なごやかな雰囲気作りに一役買っていた。

分科会 6



棚田まもりびとミーティング～棚田はどのように守るのか～



・CAST・

中島 峰広さん
早稲田大学名誉教授



第19回全国棚田サミットからはじまり、毎年恒例の分科会となってきた「棚田まもりびとミーティング」。これは、棚田博士・中島峰広さんが代表を務めるNPO棚田ネットワークのスタッフがコーディネーターとなり、全国の棚田保全活動団体のみなさんを集めて意見交換を行ってきたもの。「棚田オーナー制度」など棚田保全活動を、変化していく今日、どう進めているのかなど、現場で活動する農家の情報交換・意見交換の場となる。

2部では、棚田生産者中心のグループと棚田オーナーや販売関係など都市側中心のグループに分かれて議論した。申し込み総数99名。



岐阜県恵那市坂折棚田保存会(写真右)も報告



2部の棚田生産者が中心のグループ



佐賀県唐津市の蕨野棚田からの報告も



佐賀県有田町岳棚田保存会などもその場で報告者に



2部には小谷村の松本村長も参加。「うちは地元の施設は多いのですが、村の米より外の米の方が安いので、この米はなかなか使われない。ほかの地域はどうなのか話を聞きたくてここに座っています」



農林水産省地域振興課松本雅夫課長もフル参加



全国からの保存会メンバーがテーブル後ろにはたくさん

CASTから



中島 峰広さん

担当した「守り人ミーティング」では1部、2部を繰り返すことなく、例年のように連続して討議をおこない、議論を深めることができたように思う。今回、分科会が1部、2部に分けられ、同じことを繰り返すという方式で行われたが、そのような方式で議論を深めることができたのか危惧するところもある。

そして、「守り人ミーティング」への参加を従来のような東西に分けたブロック制や保存会の会長のみを招くクローズド制を廃し、全国から誰でも自由に参加できるオープン制にしてみたが、失敗であった。同じ保存会から集団で多数参加するため、参加を希望する他の保存会のメンバーを排除することになった。

議論は農水省地域振興課松本雅夫課長の参加を得て盛り上がりを見せ、具体的な施策が熱く論じられた。

今回のサミットは天候には恵まれなかったが、全体的には大変印象深いものであった。ことに事例ディスカッションにおける松本村長の応答が絶妙でその感を深くした。

参加者から

中山間地域等直接支払制度、
棚田オーナー制度などの事例が
参考になりました。



室内をA、Bに分割した
スタイルは良かったです。
ただ、双方の音が混ざり、
正直聞きづらかったです。

今後、棚田米の販売も考えていく
きっかけになりました。

2部形式だったおかげで、
「棚田まもりびとミーティング」を
分科会で選択できました。

会場コラム

会場は梅池パーク(スキー場のレストラン)。グリーンが映える梅池スキー場のゲレンデが目の前で、大きなガラス窓が開放的だった。2部では、広い会場にパーティションを立て、農家を中心としたグループと、都市側を中心とした2グループに分かれ意見交換した。



分科会7

世界の傾斜地農業を語ろう



分科会7

・CAST・

山路 永司さん
東京大学新領域創成科学研究科教授



棚田学会が企画提案する「国際分科会」。第23回目の全国棚田サミットではじめて設けられ、本年も継続しての開催となった。棚田や傾斜地を有効利用することは、国際的にも共通の課題。今回、イギリス、ドイツ、フランス、台湾からの報告もあり、世界の傾斜地の事例を学んだ。発表内容は「世界の傾斜農地」マルジャ・サラス氏、「世界傾斜農地会議ITLA」ティミ・ティルマン氏、「フランスのテラス農地、その全貌」ジャン・フランソワ・プラン氏、「台湾東部の少数民族が守る棚田景観保全—活性化のための共同戦線一」李光中氏、「棚田の景観」安井一臣氏、「文化的景観と棚田」山路永司氏。申し込み総数83名。



イギリスからの参加
マルジャ・サラスさん



フランスからの参加
ジャン・フランソワ・プランさん



台湾からの参加
李光中さん



ITLAを紹介する
ティルマン夫人



ドイツからの参加
ティミ・ティルマンさん



会場は国際色豊かで、世界の傾斜地農地の
情報に触れる良い機会となった

CASTから



山路 永司さん

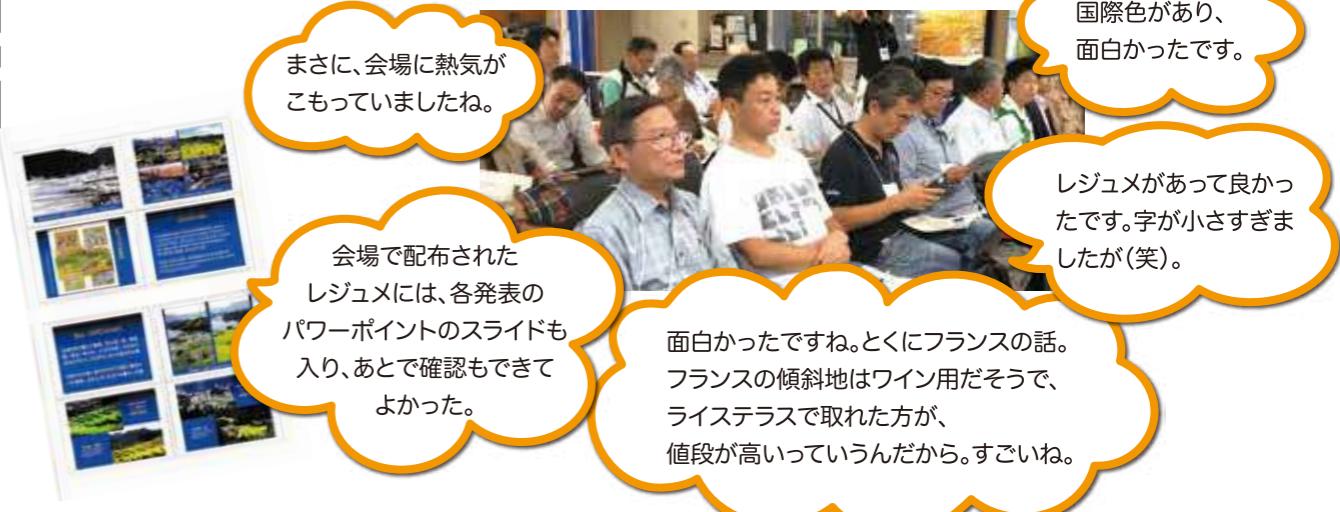
この分科会を設置・運営いただいた小谷サミット実行委員会のメンバー、とくに山田久志農林係長さんには、深く感謝申し上げます。当日の担当の方々にも、にこやかで丁寧な運営を行っていただき、楽しく時間内に進めることができました。

本分科会は、私の導入に続き、5名の海外からのゲストおよび安井一臣氏にお話をいただくことにしましたが、各分科会の持ち時間は80分間しかないので、配付資料を充実させることにし、各発表者には8月中の提出をお願いしました。

「世界の傾斜農地」「世界傾斜農地会議ITLA」は英文および和訳を併記することにしました。「フランスのテラス農地、その全貌」と「台湾東部の少数民族が守る棚田景観保全」は、スライドの英文の多くを和訳しました。その過程で、私自身が多くの新しい知識に触れることができました。「棚田の景観」は和英併記の原稿をいただき、助かりました。大急ぎの発表のあと、質疑および討論の時間は10分間しか取れませんでしたが、会場からは積極的な質問をいただき、議論を深めることができました。

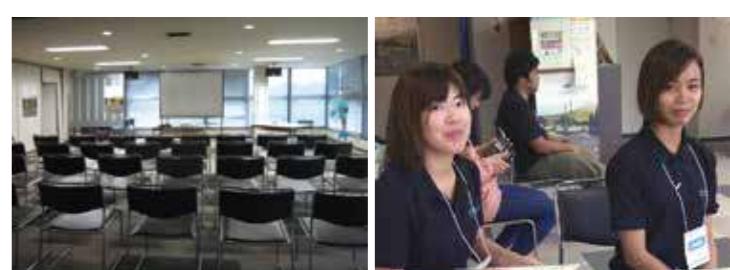
本分科会に興味を持ってください、ご参加いただいた約90名の方にも深く感謝申し上げます。

参加者から



会場コラム

会場となった梅池スキー学校は、冬場は人であふれる場所。分科会時も会場は海外からの熱い話の数々に盛り上がった。この分科会の会場には、英語を話せるスタッフ2人を配置し、各種の対応に備えていた。



分科会 8



• CAST •

本橋 成一さん
写真家
映画監督

大槻 貴宏さん
ボレボレ東中野支配人
下北沢トリウッド代表
『アラヤシキの住人たち』プロデューサー

宮嶋 信さん
信州共働学舎代表

メイン会場である梅池社会体育館で行われた分科会8。小谷村真木集落に暮らす共働学舎のメンバーの暮らしを追ったドキュメンタリー映画『アラヤシキの住人たち』(本橋成一監督作品)のダイジェスト版を見て、集落での暮らしぶりを語りあった分科会。そのほか水車製材所をつくる「アラヤシキに水車をまわすプロジェクト」が現在進行しており、その話題も共有した。キャストには、共働学舎の宮嶋信代表のほか、映画監督の本橋成一さん、そして本映画プロデューサーの大槻貴宏さんら映画スタッフも招き、話は盛り上がった。小谷村のさらなる魅力発見になったようだ。申し込み総数139名。



2部では、プロデューサーの大槻貴宏さん、本橋成一監督、共働学舎代表の宮嶋信さんのはかに、真木集落で暮らす若者2人も登壇した



分科会は「アラヤシキの住人たち」のダイジェスト版からはじまった



2部の最後のようす



中央が監督の本橋成一さん

自然の中で支えあう姿 真木集落「アラヤシキの住人たち」のいま

CASTから

私達のドキュメント映画を撮って下さった本橋成一監督、大槻貴宏プロデューサーを東京からお迎えして、映画のダイジェスト版の上映、そして真木集落のいまとして、水車をまわすプロジェクトの記録映像30分を上映させていただき、合間でトークの時間を持ちました。第2部では現場で暮らす若者、井上宗高君(小学校より小谷で育つ)と、伊藤真弥君(共働学舎で産まれた子)も登壇してもらい、夏でも車の入らぬ不便な地区で暮らしてゆく中での、希望を語ってもらいました。

第24回全国棚田(千枚田)サミットがこの小谷村で開催されたことを機に、是非とも、この棚田、農地を活用して生きてゆこうとする若者が育ってゆくことを願います。

農業で暮らしてゆく、都会から移住する安心して子育てしながら生活する。これらの思いを、経済的にもサポートしてあげられる小谷村であってくれることを切望しています。



宮嶋 信さん

参加者から

短編映画もあって、面白かった。
今も昔の暮らしをしているところが
魅力的だった。



小谷村で暮らす方たちの
様子を垣間見られて
印象的でした。



本橋監督の話も聞けて、
良かったです。

素晴らしい。
こうした暮らし方は、
協力することはできると思うけれど、
自分にはなかなかできない。

分科会8の会場となった社会体育館
(メイン会場)の通路には、信州共働
学舎で進められている水車プロジェ
クトの精巧な模型が展示されていた

共働学舎とは？

1974年(昭和49年)、今の社会に身体的・精神的な生きづらさを抱える人も、そうでない人も共に暮らす場をつくろうと、現代表の宮嶋信さんの父、真一郎さんが開設。小谷村のほか北海道、東京にも拠点がある。



全体交流会



テーブルは30卓用意し、立食。椅子は周辺に設置し、会場向かいには休憩室も用意



祝辞は、参議院議員・
棚田支援プロジェクト
チーム事務局次長の
進藤金日子氏



開催記念の鏡開きが華やかに執り行われた



乾杯は、
農林水産省地域振興課長
松本雅夫氏



司会は、
小谷CATVリポーターの北村順二さん
長野朝日放送アナウンサーの萩原早紀子さん



会場は、白馬コルチナスキー場にある
「ホテルグリーンプラザ白馬」

オープニングアトラクション 信州小谷太鼓



信州小谷太鼓は、小谷村の有志による和太鼓グループ。全体交流会のオープニングを華々しく飾ったのは、そのなかでも小学校1～6年生による「小谷っ子太鼓」。村内外で演奏を行い、大人たちにとどまらず、子どもたちによるレベルの高いパフォーマンスに定評がある。

この夜も10数人の子どもたちが、ステージとステージ下で30分を超えて大迫力の演奏を披露し、会場を盛り上げた。



1日目の夜は、ホテルグリーンプラザ白馬で全体交流会。参加者は、主催者側の予想を大幅に上回り、総勢400人を超える会場はぎっしり人で埋まった。オープニングは、信州小谷太鼓による活気あふれる演奏パフォーマンス。そして「よいしょ!よいしょ!よいしょ!」のかけ声による鏡開きで、乾杯へ。

会場特別コーナーには、小谷野豚をはじめ、小谷村のおもてなしの味を並べ、「小谷杜氏」で名高い小谷村の地酒なども。会場の中はたくさん的人が所狭しと、交流に食にと動き回り、思いをともにする全国の仲間たちと、集い語らう熱い一夜となった。



おたりの味 ・小谷村特産コーナーから・



小谷野豚ハム

小谷村では、地元の豊かな自然環境を利用して豚の放牧が行われている。それが「小谷野豚」。おたり生ハム工房から丸ごと小谷野豚の生ハムの登場!



おやき



信州の食文化に欠かせないおやき。会場には「切り干し大根のおやき」、「山うどと小谷野豚のおやき」、「野沢菜のピリ辛のおやき」が並んだ。



こしょう漬け



地酒



標高1900メートルの梅池高原の雪どけ水で作ったサイダーは、休憩にもってこい。ちょっときつめの炭酸が魅力。



小谷そば



山菜



味噌汁は2種。なめこ汁に根曲がりの竹の子汁。根曲がり竹も6月に山から採ったもの。山の幸をおすそわけ。

小谷村の食文化に欠かせないのが、そば。小谷そばのコーナーは行列続きで、スタッフが休む間もなく次から次へとよそっていた。おかげ~!



「道の駅おたり」からも小谷自慢の味を紹介

ステージでは、作り手による小谷野豚の生ハム紹介

鏡開きのお酒も分かち合う



1. 会場は400人を超える人であふれかえった 2. 小谷の棚田で作られた「雨飾山」と一緒に 3. 山口県長門市の純米吟醸「むかつく」と一緒に 4. 小谷村特産コーナーには山菜の天ぷらも 5. そばは、小谷産を利用し、作りたての味を提供 6. 松本村長(写真中心)はひっぱりだこ 7. そばの行列の向こうに郷土の味が並ぶ 8. 「白馬錦」の蔵元さんがついでくれる酒は格別 9. もち米仕込みの酒のもちり感に会話もはずんで 10. 休憩所を兼ねた通路も人がいっぱい

伝統芸能アトラクション

中谷地区 長野県無形民俗文化財 奴踊り



小谷村中谷地区にある大宮諏訪神社では8月末に例大祭が行われ、奴踊りが奉納される。この奴踊りでは毎年、地区のみなで寄り集まり作成した唄を12人の奴が詠むというユニークさ。その内容は、その年の作柄(一番)、郷土(二番)、時局世相(三番)で、地元の心が反映される。交流会では棚田サミットバージョンが披露され、参加者の顔がさらにはころんだ。

千枚田 緑のダムで国土を守り
うるおい やすらぎ 人々へ
棚田文化よ 数字だけでは表せぬ
カエルたちも大合唱

棚田サミット 奴唄



2019年は、山口県長門市で開催!



次回開催地、山口県長門市のみなさんステージでアピール
万歳三唱は、前回開催地
長崎県波佐見町副町長 松下幸人氏



抽選会



交流会の最後を飾ったのは、大抽選会。次回開催地である山口県長門市からのプレゼント(この場では目録)が用意された。長門市長が番号カードを抽選箱から取り出すたびに、歓声が会場に響いた。

伝統芸能アトラクション 下里瀬集落 獅子舞



小谷村の9月は、お祭りシーズン。各集落でそれぞれ特色ある祭りが行われている。数々の奉納芸能のなかから今回披露されたのが、下里瀬集落の獅子舞。これは獅子舞とササラが掛け合う独特な芸能として名高いもの。獅子とササラ師と呼ばれる男たちがコミカルに動き回った。笑いを誘う掛け合いの獅子舞に、参加者たちも笑顔でカメラのシャッターを切っていた。



北アルプスめぐりツアー

小谷村の自然・歴史・文化にふれる9つの旅



9月9日(日)7:30~

2日目の北アルプスめぐりツアーでは、棚田だけでなく、小谷村の大自然や歴史文化を感じてもらえる9つのツアーを用意。小谷村ならではの北アルプスの絶景を楽しめるはずが、あいにくの雨模様で足元が懸念される中でのスタートとなった。とはいっても、9つすべてのツアーいずれも無事催行された。

○二つの国立公園に恵まれた小谷村の秘境めぐり



白馬乗鞍地区の棚田を見学したのち、稗田山の大崩落跡（金谷橋より見学）へ。ここは日本三大崩落の一つで、約100年前の地層や岩肌を間近で見ることできる場所。ほかに幸田文文学碑、道の駅おたりに立ち寄り、さらに、北アルプスや小谷村の原風景の眺望が楽しめる農村公園「眺望の郷」にも足をのばした。

■参加人数 34名(参加費：2,000円／名 定員 40名)

日本三大崩落のひとつ「稗田山の大崩落」を見学。100年前の地層や岩肌が間近にあります。農村公園「眺望の郷」では、中部山岳国立公園の北アルプスの雄大な山並や小谷村の原風景が一望できます。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
07:40 白馬乗鞍棚田 見学
08:30 浦川橋（稗田山崩落跡）
幸田文文学碑 着
09:15 道の駅 小谷 着
休憩 約25分
10:10 眺望の郷 着
梅池社会体育館 着

○雨飾高原ブナの原生林「鎌池」セラピストによる癒し散策



バスで出発後、まず中谷藤島棚田で30分ほど説明を聞き雨飾高原へ足をのばすコース。ツアーのメインは、雨飾高原・鎌池周辺のブナが広がる森林の散策。ここは森林セラピー基地でもあり、セラピーガイドとともに森林が持つ癒し効果を体験した。帰り途中には白馬乗鞍の棚田も見学。

■参加人数 48名(参加費：2,000円／名 定員 20名)

小谷村は雄大な自然に囲まれ、癒し効果が科学的に実証されている森林セラピー基地です。森林のもつ癒し効果をセラピーガイドと一緒に体験しませんか。ブナ林の中で、ゆっくりとしたひとときを。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
08:00 中谷 藤島棚田
08:20 雨飾高原鎌池 着
10:30 白馬乗鞍棚田 見学
11:00 梅池社会体育館 着

○小谷村歴史文化を知る 塩の道「千国街道」を歩く



塩の道「千国街道」トレッキングツアー。参加者たちは、往事の面影を色濃く残す「千国越えコース」の一部、約3.5kmを90分で歩いた。千国街道は、越後糸魚川から信州松本の120kmを結び、塩や海産物、農産物が運ばれた重要な交易ルートでした。中でも往時の面影を色濃く残す「千国越えコース」を地元ガイドがご案内いたします。歩行距離約4km・80分のトレッキングツアーです。

■参加人数 22名(参加費：2,000円／名 定員 40名)

日本海糸魚川から信州松本の120kmを結ぶ古の道。かつて日本海から塩や海産物、信州から農作物が運ばれた重要な交易ルートでした。中でも往時の面影を色濃く残す「千国越えコース」を地元ガイドがご案内いたします。歩行距離約4km・80分のトレッキングツアーです。

行程
07:40 梅池社会体育館 発
07:50 松沢口バス停 着
08:20 弘法清水・親切・千国番所
09:30 千国の庄史料館 着
10:10 千国湯跡神社 着
午後には「千国越え訪問神社例祭」開催!!
10:30 白馬乗鞍棚田 見学
11:00 梅池社会体育館 着

○小谷村ならではの土木アート「砂防ダム」巡り



谷あいの生活を守るために欠かせない砂防ダム。その堰堤に着目した小谷村オリジナルツアー。小谷村には、姫川を挟んで多様な地質、地形があり、それに応じたダムが点在する。まさに土木アートの世界。里見、千国、塩水、土谷といった4つのダムを巡った後、白馬乗鞍の棚田にも足を運んだ。

■参加人数 25名(参加費：2,000円／名 定員 20名)

谷合の生活を守るために砂防ダム堰堤。当村は、姫川を挟んで地質や地形が異なり、それに応じた形の様々なダムがあります。このツアーでしか行けない場所など、村内に点在する砂防ダムを巡り、工法などをガイドが案内します。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
07:50 里見上 見学
08:20 千国上 見学
08:50 塩水 見学
09:30 土谷 見学
10:00 中谷 見学
10:30 白馬乗鞍棚田 見学
11:00 梅池社会体育館 着

小谷流そば伝承人が親切丁寧に指導いたします。
そば打ちは3～4名が1組で行います。



移動途中に中谷藤島棚田で30分ほど説明を聞き、そば打ち体験会場である中土観光交流センターへ到着。小谷流そば伝承人が親切丁寧に指導。体験は、3～4名が1組になり、和気あいあいムードで盛り上がった。最後は自分で打ったそばに舌鼓。

■参加人数 25名(参加費：2,000円／名 定員 40名)

高山植物の宝庫、「梅池自然園」を地元ガイドの案内で歩きます。ミズバショウ湿原は、比較的平坦な木道を気軽に歩けるコースです。当ツアーは、楠川まで歩きます。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
07:40 白馬乗鞍棚田 見学
08:30 中土観光交流センター 着
そば打ち体験
11:00 梅池社会体育館 着

○梅池高原ガイド付トレッкиング



梅池高原をまるまる堪能するコース。梅池ゴンドラ「イブ」に乗り、さらに梅池ロープウェイに乗り継いで、標高約1900mの世界へ。高層湿原「中部山岳国立公園 梅池自然園」を2時間ほど散策。地元ガイドとともに高山植物を楽しみながら、気軽に歩けるルートで楠川まで歩いた。

■参加人数 13名(参加費：4,300円／名 定員 40名)

八方尾根ゴンドラ・リフトを2本を乗り継ぎ、終点から約1時間歩く整備された自然研究路をガイドと一緒に散策します。道中に咲く高山植物も可愛らしく道に彩りを添えてくれます。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
07:45 八方ゴンドラ「アダム」乗車
アルペンクワッドリフト
グラートクワッドリフト
八方尾根自然研究路
(約2時間)
10:15 リフト・ゴンドラ乗車
11:00 梅池社会体育館 着

○八方尾根ガイド付トレッкиング



国際観光リゾート白馬村の八方尾根を満喫するツアー。八方ゴンドラ「アダム」に乗り、アルペンリフト、グラートリフトを乗り継いで八方尾根へ。そこから約2時間、整備された「八方尾根自然研究路」をガイドとともに散策。雨天ながらも、道中に咲く高山植物などが彩りを添えてくれた。

■参加人数 25名(参加費：3,600円／名 定員 40名)

1998年長野冬季五輪の舞台となった「白馬ジャンプ競技場」。元ジャンプ選手がジャンプ台をご案内します！併設するオリンピック記念館もご覧いただけます。

行程
07:30 梅池社会体育館 発
07:45 白馬乗鞍棚田 見学
08:30 白馬ジャンプ台 着
(約2時間)
11:00 梅池社会体育館 着

○白馬ジャンプ台ガイド付ツアー



1998年長野冬季五輪の舞台となった「白馬ジャンプ競技場」(白馬村)。元ジャンプ選手が案内するスペシャル企画。白馬乗鞍の棚田見学をしたあと、ジャンプ台を2時間ほど見学した。この日のジャンプ台には、合宿練習中の選手たちもいて、ダイナミックな光景に出会えた。併設するオリンピック記念館も見学。

■参加人数 11名(参加費：2,000円／名 定員 40名)





○小谷村の棚田めぐりツアー



一番人気だった小谷村の棚田めぐりツアー。小谷村は棚田が点在し、その棚田にたどり着くには道が細く、大型バスが近くまで入れない。そのため、小型バスを利用し、限られた人数でのツアーとなった。

■参加人数60名(参加費:2,000円／名)

朝7時30分、雨をよけながら指定号車のバスに乗り込み、出発。地元農家や役場職員によるガイドが、村の農業の状況などを解説。雨模様と霧に包まれた北アルプス山麓ではあったが、急峻な地形に開かれた棚田が、霧の中から幻想的な趣で姿を見せてくれた。

まずは、白馬乗鞍地区へ向かい、降車しての棚田見学。ほか村内の、虫尾、阿原といった地区は移動の車中から眺め、中谷藤島の棚田は降車し、地元からの説明に耳を傾けた。そして、小谷野豚の飼育現場にも足を運び、特産を生み出す苦労にも触れた。

小谷村は54集落あり、棚田はいずれも標高600～800mに位置する。その多くで育てられているのが「あきたこまち」。最近では、荒廃地にそばを植えるところも増えてきており、白い花がなびく美しい景観も見られた。



白馬乗鞍地区の棚田へ

村全体の水田耕作面積120haのうち、約4分の1を占める白馬乗鞍地区。個々での簡易な整備はなされつつも農道や水路の整備が不十分で、荒廃が進みつつあったため、平成22(2010)年から大規模整備を実施。現在、面積の半分以上を担い手農業者が管理する。

現地では、畦畔の草刈り労働軽減を目的とした畦畔の芝植え(クリーピングベントグラス)の説明が、(株)雪印種苗のスタッフからなされた。



車窓から虫尾地区など棚田を望む

虫尾地区は、中山間地域等直接支払交付金を利用して、基盤整備を進めた。

近年、シカやイノシシなど獣害に悩まされ、皆で協力し合って、棚田全体に電柵を張るなどの対応をしていた。

車窓から見える急峻な地形の棚田のなかに赤い屋根の民家が点在する集落風景は美しく、参加者からは「日本のイスミみたい。ここ止まって！もっと見たい！」という声も。



活性化に取り組む中谷地区藤島棚田へ

小谷村では平成18(2006)年から、棚田オーナー制度を5つの地区で取り組んでいる。平成17年に40年以上荒れていた棚田を復旧させ、オーナー制度を開始した中谷地区。地元のメンバーが傘をさしながら、バスを待ってくれていた。

かつては205戸あったが、現在は100戸程度になり、「中谷開発委員会」、「中谷郷が元気になる会」を結成し、地域の活性化と助け合いをモットーに活動中という。



小谷特産の小谷野豚飼育の現場へ

小谷野豚は、小谷村で5軒の農家が20年ほど前から手がけている。年間約200頭の出荷という稀少な特産品。放牧することで、脂が良く乗った肉質となる。見学した放牧エリアは、かつて災害で集落が押し流されて、河川敷となつた土地を利用している。

最後は、道の駅おたりへ。小谷村特産の山の幸、里の幸にいろいろ目移りしながら、お土産選びに大忙し。最後は一人ひとりに声かけしてのお見送り。



新しい後継者、大阪出身の地域おこし協力隊員が説明に立ち、参加者からの質問に答えた



晴れた日の小谷の棚田

閉会式



2日目、「北アルプスめぐりツアー」のあと、11:30から閉会式が行われた。まず最初に、松本小谷村長から感謝の言葉が伝えられた。そして、小谷村らしさを出した「山間地農業を守ろう宣言」。小谷村認定農業者の深澤勉氏が自らの言葉で会場に呼びかけた。宣言の後は、会場と一緒に「がんばるぞ!がんばるぞ!」と拳をあげての力強いコール。明日への活力がみなぎる閉会式となった。

最後は、次回開催地・山口県長門市へ全国棚田（千枚田）連絡協議会の旗を引き継ぎ、これからも全国で連携しながら棚田を後世に残していく決意を新たにした。



閉会を締めくくるあいさつは、
小谷村議会宮澤正廣議長(写真右)から



「山間地農業を守ろう宣言」では、会場みな立ち上がって「がんばるぞ!」の声をあげた

次回開催地へバトンタッチ



第25回全国棚田(千枚田)サミット開催地、山口県長門市が登壇し、長門市の大西倉雄市長が次回開催をアピール。開催日程は、2019年10月12日(土)～14日(祝)。そして、協議会旗を小谷村の松本村長からしっかりと引き継いだ。

「山間地農業を守ろう宣言」

皆さん、こんにちは。

私は小谷村認定農業者、営農集団「百姓七人衆」の代表を務めております、深澤勉と申します。

今回のサミットを通じ、棚田を守る多くの方々と知り合い、意見交換が出来たことにより、それぞれ違った角度での農業スタイルではございますが、農地の保全や利活用に様々な情報やヒントをいただくことができました。そして、中山間地農業を守っていきたいと思う、「おもい」が一層強くなりました。

代表して中山間地農業を守る決意を表明し、小谷村宣言とさせていただきます。

先人達の知恵と惜しみない努力で守られてきた中山間地の棚田や畑などは、人口の減少や高齢化による担い手・後継者の減少で、失われつつある状況です。棚田は次世代に引き継がなければならない貴重な財産とも言われていますが、現実的には担い手の確保や水路の維持など大きな課題を抱え、決して明るい未来が開けているわけではありません。

オーナー制度をはじめ多くの取り組みで棚田を美とした都市部の人たちとの交流事業が各地で定着出来ていることは、棚田保全の一筋の光となっています。それぞれの地形や気候、文化など特徴を活かし、どのように保全、利活用できるのか知恵を出し合い、汗をかき、希望を見つけて発展させていきたいと思います。

中山間地農業の未来を託されていることを誇りとし、全国の多くの仲間との絆を深め、また、必要に応じて行政の支援を得て、棚田をそして中山間地農業のある暮らしを守っていきます。そして、私たち百姓七人衆は法人化を目指しより一層努力してまいります。

それでは最後に皆様、ご起立をいただきまして声高らかにがんばるぞ宣言をさせていただきます。



小谷村認定農業者、農業委員の深澤勉氏が
「守っていこう！」と宣言した

棚田を守り、中山間地農業を がんばるぞ がんばるぞ がんばるぞ

「百姓七人衆」です。
がんばりましょう！



閉会式後、体育館外では「百姓七人衆」(写真左2点が百姓七人衆のメンバー)がお手製のそばで最後のおもてなし

「ありがとうございました」



「また来てください！ぜひ晴れたときに！」最後まで雨。でも、最高の笑顔でみなさまをお見送り



テントブース



小谷村キハダ生産組合



関東甲信クボタ ヤンマー・アグリジャパン



長野県



飯田よこね田んぼ



棚田学会



長野県農村文化協会



信州共働学舎



小谷村マルシェ



百姓七人衆



南小谷郵便局



J A 大北



北アルプス山麓ブランド

メイン会場の
社会体育館入口へ

→受付

体育館内

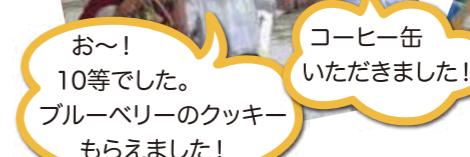
写真のような景色を
実際に見てみたいくな
りました。別の機会
にまた来たいです!



お楽しみ抽選



うちわが
'atari(あたり)'の人は
ガラポン抽選できますよ～。
ここですよ!
一等賞は、小谷村の宿泊券です!



一等賞!!
うれしいです。
東京から参加しました。
東京から来た甲斐がありました。

小谷の味



あたり流筍だんご

小谷産の筍で巻いただんご。小谷
村ではヨモギを使わず、山菜の一種
オヤマボクチ（うらじろ）を使う。その
ため、香り高く美味。

小谷村の素晴らしさを発見しました!

おもてなしの高さに驚きました!

よくぞ、小さい村で実施されましたね。村民の皆様のおかげで良い
体験ができました。ありがとうございました。共に頑張りましょう!

ツアー出発など雨の中、みなさんが手を振って
送り出してくれました。非常にうれしかったです。

小さな村の素晴らしいサミットに感謝!

棚田ツアーの枠をもっと増やしてほしかったです。

スキー場を活用したサミットは小谷村ならでは! 楽しませもらいました。

小谷村の自然の厳しさのなか、棚田保全やさまざまな活動
を全力で行う地域の方々の話を伺うことができ、非常に力
をもらいました。様々な方と交流してできた繋がりを今後の
自分たちの取り組みにつなげていきたいと思います。

小谷サミット土産



受付で受け取る小谷村紙袋の中には……

お土産は、小谷村の「棚田米のおかゆ」を
はじめ、美しい高原植物が描かれた「梅池自
然園の金太郎飴」、小谷村キハダ生産組合の
「キハダのストラップ」。かつて、古着などを
裂いて再び織り直した伝統工芸小谷ぼろ織
り。今、新しい作品が生まれている。この、「ぼ
ろ織りのベアベル(熊よけ鈴)・コインケース
(小銭入れ)」をお持ち帰りいただいた。

参加者の声

小さな村でこれだけの催しをつがなくされたことに敬意を表します。催し、送り迎え、宿泊手配、万全でした。

これまで一番良かった!事例ディスカッションが良かった!



棚田の置かれている厳しい状況を再認識しました。これからもメンバーで知恵を出して、棚田を存続させていきたいと思いました。

とても充実していました。実践につなげていきます。

参加人数を制限しても良かったのでは?
会場間の移動がたいへんでした。

ここまで地産地消だと来た甲斐があります。
これまで訪れていても、ここまで地産地消はなかったですから。

宿なども棚田を活用したら良いと思います!バリ島のウブドなどは、宿と棚田が一体となった観光地。参考になると思います。30年かけて建物を統一するなど、地域のデザインコードをつくって素敵な地域になるといいな。

分科会の案内が良かったです。スタッフの誰にたずねても、親切に教えてくれた。

スタッフの方々の心遣いがものすごく良かった!



小谷村のスタッフのおもてなし、とてもきめ細やかで、すべてがうれしかったです。

様々なところから棚田保全の実践者が参加する中、各地の棚田保全の方がみんなで登壇する場を今後は設けては?



今後、棚田を教育等に活かしていくことが存続につながるのではないかと感じた。



小谷村が一つになって大会を執り行う姿勢が全面に出ていて、とても温かいと思いました。

とにかく参加させていただき、良かったです。すべて最高に良かったです。来年も来ます。

小谷村の人たちの熱意を感じました!

小谷村は村内に百選ができるほど!ぜひ、残してほしい。

現地(棚田)が標高800mと高所での米つくりには感動しました(わが地元・佐賀県有田は150~230mの生育なので)。今回も日本の原風景を堪能できましたが、そこで暮らすと思うと大変な苦労もあると思いました(特に少ない人口のなか、除雪で多くの費用と人力がかかり、生活も大変)。冬場はスキーの観光客で混雑し、夏から秋にかけては紅葉と棚田の景色が堪能できる小谷村。観光客や棚田オーナー等、多くの参加者が見込まれると思うので、地元への呼び込みに頑張ってください。また、時間ができ、元気なうちに今度は夫婦二人で小谷村を散策してみたいと思います。

地域でがんばられている方々の話をうかがい、感銘を受けました。

単年開催という印象でしたので、これまでのサミットの総括と課題を前提にサミットを行うのが良いと思います。サミットは長く行い、ゆっくりと成果が出るものと考えます。サミットを上手に活用してください。



運営・スタッフ編

事例ディスカッションでは、司会進行のアナウンサーがとても会を楽しく盛り上げてくれました。村長さんのお人柄も素晴らしいと思いました。

次回は、2日目に分科会の振り返りがあれば良いと思いました。

全体交流会は、農や食に関係している者として、食べ残しなどとても悲しかったので、量の調整などができる仕組みがあれば良いと思いました。

とにかく参加させていただき、良かったです。すべて最高に良かったです。来年も来ます。



会場設営(屋外編)

～サミットを迎える～



メイン会場となる梅池社会体育館を眺める

9月7日(金)、村の静かな日常を一変させる時が来た。メイン会場を作り上げるのだ。前日朝から、役場職員約30人をはじめ村民や関係者などスタッフ総勢約50人が、梅池社会体育館を手作りでサミット会場へと仕上げていった。残念なことに、前日も雨の中だった。

まずは、体育館外のテントブースの設置から。雨粒が落ちる灰色の空の下、色鮮やかなカッパに身を包んだスタッフたちが息もぴったりにテントを組み上げていった。

日常の空間を巨大なメイン会場に変える



9月7日(金) AM9:00

各自、仕事を見つけては次から次へ動く

AM9:30

せ～のっ!!

持ち上げて!



テントの骨組みからスタート

白いテントを骨組みに張る

6人そろそろとテントを持ち上げる

そこにあるのは雨とカッパと体力と!



赤、青、オレンジ、カーキなどカッパの賑やかな色とは対照的に、スタッフは黙々と作業を進めていく。足元には雨がたまり……

そして
おもてなしの
心

受付ブースの準備は当日も続いている

9月8日(土) 早朝



受付の準備は、雨を防ぎつつ、入念に確認しながら進めた



結ぶ作業は多し

AM10:00

上から見ると、白いテントが整然と並ぶ

あと少し!

せーの!!

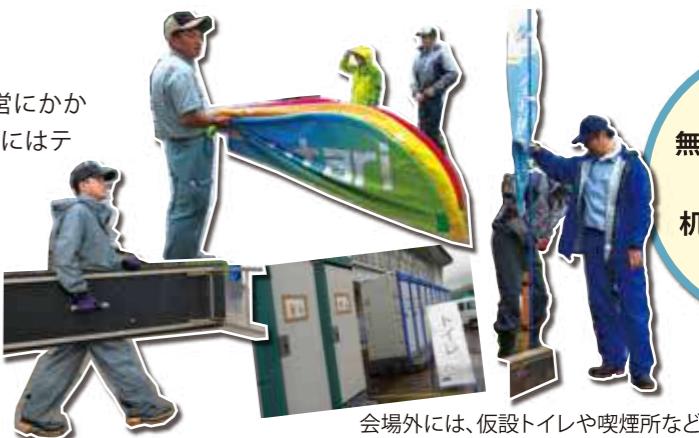
のぼりはもっと上、上!!

AM11:30

腰痛い～

あうんの呼吸で

サミット前日の午前中、テントブース設営にかかわったスタッフは30～40人ほど。11時過ぎにはテント設営を済ませ、続けて机の搬入配置、また、のぼりの取り付けなど細部にもこだわって設営していく。11時過ぎ、雨はしまし上がったが、それまで、たとえ雨の中でも手を休めることなく仕上げていった。屋外設営が終わると、各自昼食を取り、午後の体育館内作業へと移っていた。



お昼前、
無事テントブースが
立ち上がり、
机やのぼりも整い、
翌日に備えた。

会場外には、仮設トイレや喫煙所なども設けた

テントブースの仕上げは、翌朝の搬入で!

9月8日(土) 早朝



机、足りて
いますか?

翌朝は7時前から出店ブースへの搬入が進み、さらに会場センターにはテントを張り、飲食用のテーブルと椅子も設置

会場設営(屋内編)

～サミットを迎える～



メイン会場となった梅池社会体育館内部

6
体育館床に
シートを張り、
椅子を並べ、
特設ステージを作り、
壁を飾る作業だ



9月7日(金)

PM12:00



それはまるでスポーツのごとく、正確



7日午後、昼食を済ませたスタッフから、体育館内の設営が猛スピードではじまった。まずは体育館の床に土足であがれるようシートを敷いていく。体育館の奥行きにあわせ、帯状に切った、長く巨大な白いシートをしわやよれがないよう張り付ける。複数の男性スタッフが床をはい、声を合わせ、テープで止めていった。しわやよれは御法度だ。そこで人がつまずくと危険だからだ。屋内の会場設営は、心くばりなくしては成り立たなかつた。

快適で美しいホール空間を出現させる



職人技で特設ステージを作る！

事例ディスカッション等で使用する特設ステージ。本ステージ向かって右の体育館フロアに手作りで設置した。鉄パイプで骨組みを組んだ上に床パネルを置き、角材を利用し固定していく。固定ができれば白い布で覆い、赤いじゅうたんをサイズぴったりに張る。スタッフたちの職人技が大活躍だ！式典にふさわしく、美しいステージができあがつた。



心くばりを細部まで！

スタッフは、サミット当日が雨天であること、高齢の参加者も多いことなどを想定し、準備を進めた。会場内部は、段差部への気配り・隅々まで掃除を行き届かせるなど、自ら気がついた点を労を惜しむことなく手がけ、安全と快適さを追求した。傘袋には「濡れた傘を持ち歩くのにご活用ください」といった貼り紙や、段差にも目立つよう「段差にご注意ください」といった貼り紙も用意。こうしたことが終了後、参加者から「2日間雨でしたが、傘入れの設置などもしっかりしており、周到な準備が感じられました」といったお褒めの言葉をいただきました。



次の
リハーサル
行きます！

会場設営後は、
音響スタッフと
司会のアナウンサーと共に
夜間までリハーサルが続いた



当日スタッフの動き



本サミットには、役場職員はもちろんのこと、保育士・地域おこし協力隊員等も責任ある立場で臨んだ。また、村議会議員・農業委員・JA・小谷村の警察官といった地元の尽力も大きい。少ないスタッフ数ながら混乱もなく、無事2日間を終えることができた。こうした背景には、小谷村がこれまで多様な催しを数多く手がけてきた経緯があり、スタッフ各自が何をすべきか承知していたことがある。

受付

約650人を受付

受付は屋外、体育館入口向かって左に配置した。受付スタッフは当日朝7時に集合し、受付体制を整えた。雨で作業が増えるものの、滞ることなく、事前申込者のほか、村内からの当日参加や飛び入り、メディア関係にも対応した。1日目夕方は、交流会の受付へ移動し、受付やクローケーも担当。さらに2日目は昼食係を受け持ち、お弁当券を昼食と交換した。



庶務

スタッフの要として

サミット運営に係わる全般を担当。参加者対応のほか、各係の非常時対応、人員要請対応などを行った。さらに各係の支援も業務。事務室入口には、サミット総合案内窓口を開設し、参加者からの問い合わせにも対応した。ほかアナウンス・救護・スタッフセンターといった各係を配置した。参加者からは「大会運営は親切で行き届いていた」との声もいただいた。



交通 シャトルバス

会場移動にシャトルバスを運行

サミット会場への無料送迎バスは、JR長野駅(往路3本、復路1本)、JR糸魚川駅(往路2本、復路2本)、松本空港(往路2本、復路1本)を準備した。村内無料シャトルバスは、期間中随時運行(JR南小谷駅 ⇄ 梅池社会体育館 ⇄ 白馬アルプスホテル ⇄ ホテルグリーンプラザ白馬)させた。自家用車での参加者も駐車場から送迎した。



案内

細やかな対応に称賛

地区内の誘導は、当日朝7時に集合したのち、県道交差点等にて誘導案内を開始。1日目の昼食会場への移動は、まずAゲート、Bゲートと2つのルートに分けて誘導することで、12か所の案内をスムーズにさせた。さらに分科会も8会場のため、随所で案内役を担つた。こうした対応は「スタッフが献身的にがんばっていた」という称賛の声につながった。



雨対策

△その場でスタッフが臨機応変に動いた△

テント

テントの数を増やす

当日は朝から雨模様。駅や空港からのシャトルバスに合わせ、多くの人が一度に受付に集まることが予想され、テントの数を増やして対応した。それによって、受付を待機するあいだも、参加者の方々には雨を避けてもらうことができた。



防水

濡らさない!

受付開始前、テント内は想像以上に雨が入り、急きよ土産袋の設置場所を移動させ、高いテーブルの上に並び替えるなど対応に追われた。また、テントとテントの間から水が流れ落ちたり、屋根に水がたまるため、水が中に入らないよう手を打った。



排水

水を掃き出す

受付開始前、受付テントでは参加者の方々の足元が濡れて困らないよう、人力でアスファルトの上にたまってきた雨水を掃き出した。こうした作業をくり返し、テント内の排水を行った。信州大学の学生たちも排水に協力してくれた。



入口

すべり防止

体育館入り口では、床が滑ることが心配された。スタッフは急遽、玄関下全体をマットで覆い、入口にタオルマットも設置。段差がある部分は、つまずいたり踏み外すことのないようテープで色をつけて際立たせ、見守りと声掛けにも努めた。



雨具

ビニール袋を手渡し

塗れた傘を収納するビニール袋は前日からセッティングしており、当日は、信州大学の学生たちをはじめ、入口対応のスタッフが声かけしながら来場者に手渡した。さらにツアーデスクや小谷村ブースでも雨具を販売した。



サミット終了後の動き

スタッフから



片付けの手を一度止め、
スタッフたちに村長が感謝を伝える

閉会式終了後、お見送りに出ていたスタッフがそれぞれの持ち場に戻り、片付けを開始した。圧倒的な速さで片付けが進む。

体育館内の椅子が片付いたころ、村長からスタッフたちへねぎらいと感謝の言葉がかけられた。「小谷村で開催するには休日開催しかありませんでした。みんな平日は通常業務で忙しいですから。参加されたみなさんから『みなさんが親切だった。笑顔が良かった』というお言葉をいただきました。ありがとう」。



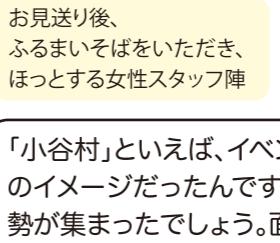
1: 村長もスタッフたちと一緒にお見送り
2: お見送り後、ふるまいそばをスタッフも駆走に
3, 4: バスが出発するとテントブース内も片付け
5: 小谷村出身の萩原アナ。スタッフとして奔走する兄と!
6: 受付もまずは大量のゴミの片付けに追われて
7: お茶の紙パックゴミもすべてきちんと漬した
8: 何本ものぼりを一気にはずしていく
9: ソーでガイドを務めた棚田農家も働く働く!
10: トイレも洗面所もきれいに拭き上げ
11: 体育館内のゴミも半端ない!
12: 体育館内では椅子の撤去がはじまつ
13: レンタルの椅子は袋にちゃんと戻す
14: 垂れ幕も高いはしごにそろそろと登り、はずした
15, 16: 雨の中、人海戦術でテントをたたんでいく
17: バシャッ! テントには雨水がたまっている
18: 雨は降り続き、手元も滑るために作業を困難にした
19: 体育館に掲げていた看板も降ろす
20: 少しずつ会場は元の姿へ
21: 体育館の中もシートがはがされ、元の姿に
22~25: 紵緞もゴミもダンボールも次々と外へ搬出
26: ゴミは役場に持って帰る。積むのも一苦労
27: 役場で濡れたテントやのぼりを広げて干す



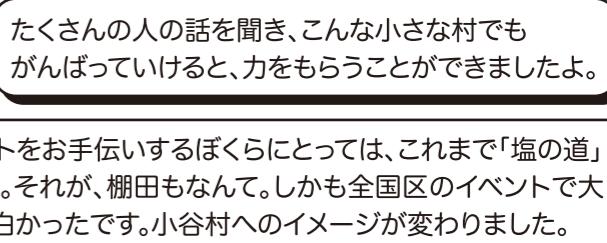
小谷村の棚田農家



イベント業者スタッフ



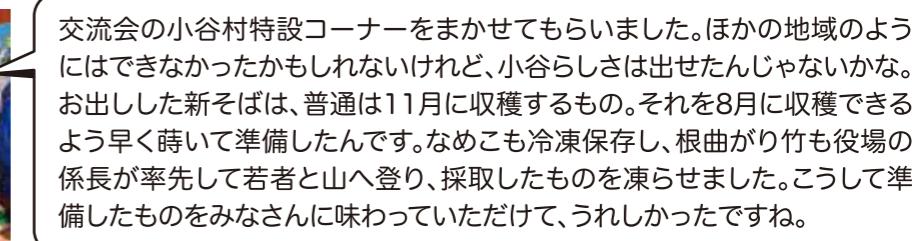
お見送り後、
ふるまいそばをいただき、
ほっとする女性スタッフ陣



「小谷村」といえば、イベントをお手伝いするぼくらにとっては、これまで「塩の道」のイメージだったんですよ。それが、棚田もなんて。しかも全国区のイベントで大勢が集まつたでしょう。面白かったです。小谷村へのイメージが変わりました。



株道の駅あたり
社長



交流会の小谷村特設コーナーをまかせてもらいました。ほかの地域のようにできなかったかもしれないけれど、小谷らしさは出せたんじゃないかな。お出しした新そばは、普通は11月に収穫するもの。それを8月に収穫できるよう早く蒔いて準備したんです。なめこも冷凍保存し、根曲がり竹も役場の係長が率先して若者と山へ登り、採取したものを凍らせました。こうして準備したものをみなさんに味わっていただけて、うれしかったですね。



スタッフとして手伝った村議会議員

棚田サミットinおたり 開催を振り返って

棚田サミット実行委員会事務局 山田久志(小谷村役場観光振興課)

第24回全国棚田(千枚田)サミットにおかれまして、関係者の皆様の多大なご協力のもと無事に終了することができました。心より感謝・お礼申し上げます。

本来、サミットとは「首脳会議」であり棚田を保全すべき自治体の首長や農林水産省関係者を主に棚田保全のための意見交換を行うべきものと思われます。

しかし、私もこの山間地で農業に携わっている立場から、「傾斜地での農業の過酷さ」を農家目線により訴えたいと思っていました。山間地での水路維持・集落活動など、やはり農家の実情を考えてほしい、理解してほしいということで、映像なども用意しました。棚田は景観が良く素晴らしいと言って頂けます。しかし、現地で維持管理をする方の苦労をわかって頂くことも必要です。

参加者の皆さんにどのように伝わったかは疑問ですが、サミットはお祭りではなく、農業者の実情を考える場にして頂く催しであることを、少しでも感じて頂きたいと思います。

最後に、長野県をはじめ多くのの方々、関係者の皆様のご協力ご支援があったからこそその棚田サミットでした。ありがとうございました。



事務局の山田久志と石田明子

片付け途中、ポーズを取つてもらつてパチリ



平成30年度 小谷村棚田サミット実行委員会 収支決算見込み

収 入		
平成31年2月1日現在		
科 目	決算見込額	主たる内容
補助金及び負担金	20,135,000	
補助金	900,000	全国棚田連絡協議会
負担金	19,000,000	長野県 350 万円、小谷村 1,550 万円
総会等負担金	235,000	総会後情報交換会
参加者負担金	4,079,400	
参加費	1,395,000	@3,000×465 名
交流会費	1,855,000	@5,000×371 名
昼食代	829,400	@1300×438 ケ、@1000×260 ケ
雑 入	309,481	
雑 入	153,971	ブース売上 23,971 円、おかげ買上(連盟) 130,000 円
貯金利息	10	
繰越金	155,500	H29 実行委員会予算繰越金
合 計	24,523,881	

支 出

科 目	決算見込額	主たる内容
賃金	373,278	
サミット事務雇用賃金	115,200	事務賃金
サミット運営賃金	258,078	サミット運営賃金（信大168,000円、運転手他90,078円）
謝 礼	1,253,196	分科会講師謝礼 522,100 円、記録取材謝礼 121,000 円 ポレポレ社 411,000 円、交流会芸能 70,000 円、合唱団 129,096 円
旅費・費用弁償	790,980	サミット準備関係（講師旅費・打ち合わせ旅費等）200,160 円 協議会関係旅費 21,820 円 サミット関係者宿泊費（ポレポレ、信大ほか）369,000 円
消耗品	4,469,346	
参加者記念品	2,308,057	キハダストラップ（700 個）378,000 円、ぼろ織（700 個）436,100 円 おかげ（3,000 個）376,753 円、金太郎あめ（500 個）106,000 円 うちわ（1,100 本）133,380 円、 手提げ袋（3000 袋）720,360 円ほか
サイン関係	1,504,834	サミット昇り旗（100 枚）151,200 円、変形昇り旗（18 本）347,652 円 スタッフポロシャツ（140 枚）91,854 円 スタッフTシャツ（220 枚）390,783 円、横断幕等 274,504 円ほか
式典関係	198,542	会場設営関係資材（除草剤、清掃道具、傘用ビニールほか）
その他	457,913	事務用品（トナー、ファイル、テープ等）439,317 円 会議用手土産 18,596 円
印刷製本費	1,488,712	
チラシ等	1,395,992	ポスター・パンフ 593,460 円、マップ 121,500 円 冊子（1,000 部）662,040 円ほか
封筒類	92,720	サミット専用封筒（長形 3 号 3,000 枚、角型 2 号 4,000 枚）
食料費	1,563,780	
会議等食費	448,020	協議会関係食費 67,520 円、作業時弁当代 65,000 円 9/7 情報交換会会費 265,500 円ほか
サミット弁当代	1,527,300	サミット 2 日間弁当（スタッフ弁当・会場借用謝礼含む）
サミット飲料代	36,480	分科会等飲料
役務費	902,633	
通信料	50,760	インターネット回線使用料 4,230 円 / 月 × 12 月
郵送料	422,882	郵便代・宅急便代ほか
広告代	292,800	信濃毎日新聞広告費 226,800 円、エコプロ出展料 66,000 円
その他	136,191	振込手数料 19,008 円、クリーニング 11,524 円 イベント保険 84,440 円、汲取 3,439 円ほか



支 出

科 目	決算見込額	主たる内容
委託料	5,595,780	
司会業務	162,000	長野朝日放送アナウンサー派遣
交流会委託	2,145,000	交流会会場・接待等 5,500 円／人 ×390 人
撮影委託	302,400	サミット記録撮影・映像撮影
動画作成委託	858,600	小谷村紹介動画、サミット動画
情報発信委託	70,740	事務室インターネット環境整備委託
会場清掃業務	257,040	サミット会場等清掃委託（開催前・・窓ふき、開催後・・床清掃ほか）
報告書作成業務	1,800,000	報告書（500 部）作成 (ページ構成 800,000 円、清書製本印刷 1,000,000 円)
使用料	5,918,290	
会場使用料	170,000	分科会会場使用料(7か所) 100,000 円、社会体育館使用料 70,000 円
バス借上料	1,921,020	7 日～9 日 バス使用料
仮設トイレリース	142,560	体育館駐車場仮設トイレ設置
備品等リース	3,684,710	会場備品（テント、椅子、机、マット、扇風機、音響等、スマホ等）
工事費	669,488	事務室用電話工事費 191,160 円、体育館駐車場手すり 47,941 円 仮設シンク 111,127 円、ツアーコース草刈り 319,260 円
資材費	682,019	
交流会材料	465,433	山菜・キノコ類等交流会提供資材 454,408 円、玄ソバ購入 11,025 円
その他資材	216,586	弁当箱等資材 161,870 円、棚田米おかゆ米代 27,500 円 9/7 振舞酒 27,216 円
備品購入費	259,200	パソコン 2 台
予備費	109,159	
合 計	24,523,881	

運營

- | | |
|-----|---|
| 主 催 | 全国棚田(千枚田)連絡協議会 |
| 主 管 | 第24回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会 |
| 協 贊 | 大北農業協同組合 (株)白馬アルプスホテル 奥白馬高原開発(株)
(株)道の駅おたり (株)おたり振興公社 白馬観光開発(株) (株)薄井商店
北安醸造(株) |
| 協 力 | 棚田学会 NPO法人棚田ネットワーク 信州大学農学部 東京農業大学
長野県農村文化協会 長野県白馬高等学校 小谷村観光連盟 小谷村商工会 |
| 後 援 | 総務省 農林水産省 国土交通省 環境省 一般社団法人農山漁村文化協会
一般社団法人家の光協会 一般社団法人全国農業会議所
一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構 公益社団法人全国農業共済協会
日本農業新聞 長野県 長野県市長会 長野県町村会 長野県町村議会議長会
JA長野中央会 一般社団法人長野県農業会議 全国農業新聞 長野県農業共済組合
長野県土地改良事業団体連合会 信濃毎日新聞社 朝日新聞長野総局
読売新聞長野支局 毎日新聞長野支局 中日新聞社 日本経済新聞社長野支局
大糸タイムズ社 NBS長野放送 SBC信越放送 abn長野朝日放送 TSBテレビ信州
NHK長野放送局 FM長野 |

参加人数

区分	人数	備考
一般予約参加者	436	事前予約者
来賓関係者	28	式典等来賓（随行者含む）
講師等	35	分科会等講師
メディア関係	22	
当日参加者	129	村民及び近隣市町村参加者
スタッフ	159	小谷村（職員・議員等）長野県ほか
合計	809	参加者 650 人（スタッフを除く）

都道府県別参加人数

※予約者のみ 単位:(人)

							石川 (16)	富山 (10)	新潟 (36)	福島			
佐賀	福岡 (9)	大分 (4)	山口 (25)	島根 (3)	鳥取	兵庫 (2)	京都 (2)	滋賀 (3)	福井	岐阜 (16)	長野 (86)	群馬	栃木
				広島	岡山	大阪	奈良	三重	愛知 (17)			埼玉 (5)	茨城 (1)
長崎 (37)	熊本	宮崎 (1)										山梨 (3)	東京 (25)
鹿児島 (5)				愛媛 (6)	香川	和歌山 (9)					静岡 (28)	神奈川 (3)	千葉 (28)
沖縄							高知	徳島 (4)					

■ ■ ■ 第24回全国棚田(千枚田)サミット小谷村実行委員会 ■ ■ ■
(小谷村役場観光振興課農林係内)
〒399-9494 長野県北安曇郡小谷村大字中小谷丙131 TEL0261-82-2588
全国棚田(千枚田)連絡協議会公式サイト <https://tanada-japan.com/>